



男は腹がしい声で目覚めた
さっさと何だか怒鳴られている気がする

……

「アリス「ちよとよなによ、これ、ほとよなさいよ！」

上から見下ろしながら叫ぶ

夫さめの綺麗な瞳に強気の感情が移る

自分の置かれている状況は認識出来ているのだろうか

両手を縛られ天井に吊られている。

さらさら片足をも紐で縛られている。

片足を強制的に上げられているから

スカートの隙間から下着が見える。

アリス「黙ってないで、何とか言いなさいよ！」

男はようやく腰を上げた



「アリスもういいでしょう、早く離してさっさとよー!」
恥辱を受けたにもかかわらず、強氣の言葉と続ける
しかし死はより少し勢いが感じられな

ア

と、その時アリスは
自分の服がなくなっていることに気が

ア

ア

「アリス、何よこれ一体…な、何をしたのよ…!」
怯えと戸惑いが入り交じった声で言っ…
破られたわけではなく、綺麗になくなってしまっている
服自体が消えてしまっているのだ

当然乳首が見え、下着もないわけであるので
恥ずかしい部分も全てこの目の前の男に晒されてしまっている
アリス身体をぶるぶる震わせながら…



男は様から、道具を取り出した
それは男性器に似た、短棒のようなものだった

アリス「う、うう……で、それは……」
感じて男はそれをアリスの股間に入れる

ヒクヒク
アリスのヒタがうのきを上げておるようだ
アリスは「はあ」
おかしむ……あ、あれを……
私は……う……ん……

ヒクヒク

アリス

アリス

アリス

あれをあとごとに入れられたら……

痛……！！

ズボム

アリス「ひあぁ……！」

想像するやいなや

アリスの体内に突き立てられる

アリス「いいっ！ そんななのっ！」

ピクピクッ

ズブ

ビクビクッ

ぞ

アリス

想像以上に挿れられて求めてたのが
さっさと入りなかりなのに挿入されただけでいいでしょう
アリスの秘部から再びいさよよく出て行く……

糸を大きく揺らすのが、そのたびに乳首も引つ張られ
ありとあらゆる箇所が敏感になっている……

おかしい、おかしいわ……

いくらなんでもこんな……

それとも……私がこんな感じにマッチだったって、アリスなのかしら

息を切らしながら……アリスは……もう……

ズブズブ



天井から降ろされたアリス。
妹はもうボロボロだった。
あれから何度イッたのか分からない。
全身に力が入らず、自分で立つことも出来なかった。
きれるがまま、なすがままアリスは四つん這いにされた。

アリス「はぁはぁ」

てん
てん
アリスはこれからのことを予想したが、
男はスポンを下ろし、ペニスのアリスの股に近づける。
もう抵抗することは出来なかった。



アリス「ん、んんっ」

ズブズブと挿入される男の「物
ずのほりどくわえ込んでアリスは味わう

こ、こんな男の...いい、いやらしい.....

心でもそう思っても、喘ぎ声がでてしまう

アリス「あっ、んん」

気がつくとも目を閉じて男のものを

腔内で味わってしまった



ほんほんほん！
乾いた音が部屋に響く

アリス「あ、ん、んっ」

男が腰をつく度に、アリスもそれに合わせて腰を振ってしまっ
足には愛液が垂れ、胸は重力にまがれブルブル揺れる

力を入らないはずなのに、腰はそれを求めて動いてしまっ

いやなのに、いやだったはずなのに

ほんの数時間前まで、こんなこといやだったのに

アリスはどう思っているから快楽を求めていた

目には涙を浮かべながら

迫り来る絶頂を求めていた...



もっそもっと

アリスは求めていた

あそこまだまだ収まらない

先ほど腔内に発射された白濁がこぼれているが

そのままアリスは四つん這いの恰好を続ける

先ほど

先ほど、腔内に発射された白濁が

こぼれているがアリスは腰を突き上げる

それに答えたのか、男もまた

アリスの腰に手をやり引き寄せる

先

アリス「あ…、そ、そこは…」

アリスの予想と違う場所に男根は入っていた

先

アリス

次の日暗闇の中アリスは正気を取り戻していた
やっぱり何かがおかしい

あんなに感じる自体がおかしいのだ

幸いロープはほどかれていた

今なら逃げる事が出来る

例え男が許さなくても力尽くで脱出してみせる

アリスは決意した



て

「アリス「えっ、なにこれ!?!」」

明かりがつくと、さっきまで自由だった手が縛られ
自由だった足も縛られ身動きが取れなくなっている

しかも服は破られてたわわな巨乳は露わに

足はM時間脚のようになってアリスの割れ目もはっきり見えてしまっている

ま、まだこんな...

でも大丈夫。こんなまた手足が自由になったときは必ずキャッスよ
アリスは再び決意する

て



アリス「あの短棒…」

男が取り出したものを口で

アリスはつい口に出してしまっ

昨日、アリスの中で暴れ回ったあの道具

あれを見ただけで昨日の事を

思い出してしまった

あの動き、あの振動、

あの太くて固いものを感じるところに挿入される

た

男の手が局部の入り口で止まる

アリスはもう既に目に涙を溜め、顔を紅潮させていた

ぞ、それをい、入るの……？



男はアリスを裏切らなかつた

期待通りにその「物」をアリスのその小さな割れ目に対して

突き立ててゆつくりと差し込む

ちよいとその短絡にっついてる突起部分が

クリトリスにピッタリ加えるような

形で嵌まっていく

アリス「ああっ!!! こ、これっ!! これよ!! ああああ!!!」

ズブズブ

男がそれを出し入れするとビュビュッとアリスの割れ目

から愛液が飛び散る

舐を振るわせて恥じらいもなく喘ぎ声をアリスは上げていた



ドキ

……!!

あそびに出し入れされて喜んでたアリス

だが急に短棒の動きが止まった

あともう少しでいけたのに……どうして……!

口にてかかったがふと見ると

アナル近くにさらに小さい棒を入れられようとしている

お、お尻に入れるの……?

再び昨日お尻のあの感触が思い出される……

そして例の短棒のボタンも同時に……

アリスは驚きと期待の両方でそれらを受け入れた



ズボズボズボ
ズンズンズン
グングン

ズボズボズボ
ズンズンズン
グングン

あーん

あーん

グン

ズンズンズン
ズンズンズン
ズンズンズン

ズンズン
ズンズン
ズンズン

m

短棒がブルブルとしくりとりすを刺激する
同時にお尻の穴にズブズブと入れられていく

昨日の夜見た種類の快楽が同時にやってきたのだ
快楽×快楽...

それはより大きい悦びになっていく...
そんなことを考えながらアリスは絶頂を迎えようとしていた



一通りの儀式が終わった…しかし…
アリスのアソコにはまだ電撃を短棒をしっかりと突き刺している
あれがなくては物足りないのだ
あれが入っていないとダメなのだ
男は次に自分の一物をとりだした
クナイ奥が部屋に挿れる
思わずアリスは顔をしかめた
構わず男はそれをアリスの顔にくっつける
唇と口頭がキスをする

て

て

て



ズボッ

男は無理矢理アリスの口に突っ込んだ
小さい口の中に夫もく固い指が挿れられる

一瞬アリスはもせ咳をしようとするが

イキモウが入っているために上手く出来ない

容赦なく男が頭をつかみ、顔を奪って逃がろうとしなかった

んげん...

んげん

ズボッ



頭を引寄せられは離され、引寄せられは離される
幾度も繰り返しているのだ
口の中にあるペニスを上手く舐めるようにになっていた
あんまりきかっただペニスを口内で舐める
下を上手く舐ませ、亀頭を刺激し、側面を包み込む
その作戦がとつともなく良いのだ
何が良いかは分からない、だがアリスはペニスを舐めることに夢中になり
それによって自分の性感帯が敏感になるのを感じた

不意に口の中に暖かい物がはき出された
アリスは再びおぼされたが、男はアリスを離さない
口から肉棒を出すことを許さなかった
ビクビクッ
アリスもそれに同調してか短棒が入って、筒所から
大量の透明な液がとぼれ落ちた
どろりとした音がしたようだ

ビクビクビクビク

ビクビク

びく

びく

びく

びく

びく

びく

口内を精液を射精するたびに
びくびくびくびく……

びくびくびくびく





アリスの調教は驚くほど進んでいた
首輪とでとられているが
手足の拘束は既に取れている
しかし男が少しアリスを責めるともう抵抗する気もなく
次の行為を楽しみにしているアリスがいた

クリトリスをメニエで揉まれる
胸を後ろから揉まれる

それだけのことだがアリスはほとんど何も感じと喪失感になっていたのだ
アリス「ああ、良い、良いわ...」



ズワッ

初めはきつかった男の肉棒も今では余裕を持って加えられる
胸を揉まれ、あそこにはベニスを注入されている...

そしてアリスは...自ら腰を振り始める...

ズワッ...

ん...ん...ん...

ゲッ
ゲッ
ゲッ

てん

てん

てん

ズワッ...

てん



アリス「ああ、良い、良い、もっとと突いてっ！
奥まで奥に当たるまで、ああああっ！...！
身体はカクカク、あそこは濡れまくりながらアリスは求める
最早脱出することなど想像には無かった
如何にアリスが気持ちよく入るか、気持ちよくなるか
そればかりを求めていた...



アリス「あああああああああああああああああああっ……！」

んん……

男「ほう、良い乳してるな」
胸を揉まれている……？
こいね……？

パチューリ「は目覚めると自分が縛られていることに気づいた
どうやら両手を縛られ天井から吊されているようだ
とては身動きは取れない

男「ようやく目覚めか」

パチューリ「……お前、なんなの？」

パチューリ「の強気の言葉だ」

明らかに不快感を表したあと

男は口をなめていった

「お前さんのご主人様だよ」

パチューリ「誰がお前なんかの……」

パチン

男が指を鳴らした



ビリンッ

いもなりバチユリーの服が破れる

バチユリー「なっ……一体どうしたの……」

男「ここでは全て俺の自由になると言ったよ」

さすげのバチユリーも戸惑いを見せる

男「乳やせるタイプなのか、

なかなかの巨乳だな……楽しんでませ」

おっぱい

おっぱい



男「はげはれ、こゝなんか感じるんじやないのか？」
下着の上からマスを挿られる
下着腰に指の感触が伝わってくる
「ん...」
男「ふふ、その刻には表情に余裕が無さそうだが...」
「ん...」

ん...

ん...
ん...
ん...

ん...
ん...
ん...

ん...
ん...
ん...

ん

ん

ん



「はっ、はっ、はっ、はっ」

男は乳首をつまみくりくりと回す
パチュー「んん」

男「お、乳首立ちたぞ、感じてるんじゃないのか？」
パチュー「そ、そんなわけないで……」

男「頑張るじゃないか、それでは……」
次に男は下着を下ろす

パチュー「この状態が……」
パチュー「の小さなまめをこころは撫で回しはじめた」

んんんん

んんんん

はっはっ

「こっちはほりパチューも感じるのか
身体をくねられなんとか避けようとするが
縛られているため、男の指からは逃れられない」

パチュー「あ、はっ……」
声がうわすてきた……

んんんん



美味しそうな果実だな

男はパチュリーを口に含んだ

舌が乳首に絡みつく

吸われたり、なめ回されたり、舌で押させたり、擦られたり

男の口の中で執拗に乳首を舐められる

パチュリー「や、やめなよ……はあ、はあ、こ、この恥知らず……！」

男「おっぱい吸われて、こんなに

マソ汁垂らしているやうに恥知らずとか言われたくないな」

はあはあ

ぐちゃぐちゃ

はあはあ

2本指でパチュリーの秘部の中まで入れている
時折、クリを刺激しながら、愛撫を続ける
愛液が垂れグチャグチャ音が出ている

男「こんな音出して感しまくってんじゃねーか
男の指の速度が上がる

パチュリー「だ、だめ……！」

はあはあ

ぐちゃぐちゃ

はあはあ



あゝあゝあゝあゝあゝ
男の子が来たか、ママの前で泣いてお漏らししてるなんてどっちが恥知らずだ
ははははは、とママの高笑いが響く
ふたりは泣いてしまった。地獄よりもこの恥辱を受けたことが悔しかった……

あゝ...
あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝ

ガッ

ガッ



「パチー」と、今度は何となくういでしょ…
机に倚せられ、足と手を後ろ縛られている
— 休みの間にこんなことを…
ひょっとしてこんなことを出来るのは…まじか…!!
男「よお、良い格好だ。高さもちょうど良い、これはベストポジションだぜ」
「パチー」を、何をやるのよ…!!」

てん

てん

てん



男は再び指を鳴らす

途端、パチュリーの下半身が熱くなる

男「何で決まってるんだろ、気持ちのいいセックスだ！」

パチュリー「うう、はぁはぁ…」

男がペニスを近づける

パチュリーの息づかいが荒くなる

抜おかしい。何故こんなには身体が熱いの？

パチュリーは不思議に思っていた

多少辱めを受けても、こんなに身体がぞくぞくするなんて

ペニスが秘部に当たる。

「パチュリー」のひあつ…!!!

思わぬ大声を上げてしまう

あんな可愛いわあ

ん

ん

ん





男は激しくヒストン運動を開始した
ぐちゅぐちゅぐちゅ

ハチユリーの割れ目からいやらしい音がする
あまりの激しさに愛液が飛び散る

ハチユリー「あぁっ！ あぁっ、そんなんっ！
はげっ！ だ、だめっ」

ハチユリーの大きな胸が押しつぶされてムニムニ揺れる

男「そんな揺らしてを無理なもえさっ！ だめ」

ハチユリー「ぞ、そんなこと…あああっ！」

「はぁっ」

男「もう少しじゃあもっ！ 激しくいっせー！」

さらた動きが激しくなった

「はぁっ」

ハチユリー「いやあああああああああああ、
あああああああああああ、
あああああああああ、
あああああああ、
あああああ、
あああ、
ああ、
あ、
はぁっ」

「はぁっ」

「はぁっ」

「はぁっ」

「はぁっ」

「はぁっ」

「はぁっ」

「はぁっ」

「あぁっ」

「はぁっ」

「はぁっ」

「はぁっ」

「はぁっ」

「グッ」

「グッ」



おっおっおっ
L.L

バキバキ
バキ

バキバキの体内に注射された
バキバキ「あああ……って嫌いな……」

おっおっ

グッ
グッ
グッ
グッ



「パチユリー」その、そんなのは知らない...無理よ...」
「男」そどうかいの？ やってみなくちゃ分らないぜ...」
「パチユリー」無理よ...」
言葉上では無理といていたが、
パチユリーにはあれが入らたらどうなるか
想像するだけで身体が熱くなっていた
まだまだオマンコは収まらない
何かを加えたくてヒクヒクしているのだ
だからパチユリーは静かに言う
「パチユリー」そんなのは知らないわ...」



ズボン
「パチユリー」い、痛い」
規格外の大きさだった
痛みに震える、奥に当たる
こんな感覚は想定外だ
男「お、意外といけるじゃないか」
男がぐりぐりと棒を回す
「パチユリー」う、動かないで……ああああっ」

カ
ゴ
!!!
!!

パチユリー……!!!

カ
カ
カ



男「徐々に慣れていってやるよ。俺は優しいからな」
男はゆくりゆくり出し入れをおこなった
ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ

既に濡れていた

「パチユリ」の責められれば責められるほど濡れていくのを感じた

「パチユリ」うう……こんな……こんな……

気持ちいいなんてと言わなかつたのはさやかな抵抗だろう

「パチユリ」は目を潤ませ、身体を反らし、あそこを濡らしながら
喘ぎ声を出し、その快楽に身を任せた

「ハッ」「グッ」「ズッ」

ズッ、ズッ

「ズッ」「グッ」

ガッ

「ズッ」「グッ」

ズッ

ガッ

「ズッ」「グッ」

ズッ

ガッ

ガッ

ズッ

ガッ



男「ほれほれ、はやくいれて欲しいんじゃないのか」
ハチユリ「は、はやく、いれなさいよ！」

男「全く舌の魔法使いだこと、ちんこでクリ擦られて喜んでやる」
早くいれて欲しい焦らさないで…
度重なる言葉責めを全く耳に入らずハチユリは男根を欲しが

ハチユリ「お、お願い、早くそれを…入れて…」

アハハ
アハハ

アハハ

真

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ



男「ほらよ、これが良いんだろっ！」
ずぼりと根本まで一気に挿入した

パチューー「あああああ、そ、そうよ、これが欲しかったの。あああああああっ！」

あゝっ！！

アッ！！

アッ！！



「ハチユリー」良い、良いわっ！ もっともっとちょうだいいいい」

普段よりも激しい入れ方だが、ハチユリーには「こ褒美だった

もっともっとおちんちんが欲しい

男」そんなに良いのか、このエロ魔法使い」

ハチユリー」良いの、良いのよ、私は……」

男」どうして欲しいのか聞いてみる」

ハチユリー」もっとおちんちん入れて、わたしのおくまで入れてを……！！！！

もう何も考えられない、もっとおちんちんを……

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」

ハチユリー」



男「な、中に出すぞっ！」

ハチユリー「中に出してええええ、
精液ぶっかけてえええ、もっとおおお」

ドビュッドビュッ……

ハチユリー「あああ、いいわあ、あついいいい」

ぶるぶる震わせながらハチユリーは昇天した

ハチユリーは何故ここにいるのかこれからどうするのか、

そんなことはもう一切考えなくなっていた

次のおちんちんはいつになるかそればかりを考えていた……

ハチユリー「もっともっともっとおおおあいいいいい」

FLAP

ゴッ

ゴッ

ビュッ

ビュッ